

大学生における携帯電話の普及による友人関係の変化¹

小 原 一 馬

The Influence of the Diffusion of Mobile Phones
to the Relationship of University Students

Kazuma KOHARA

1 基本仮説と先行研究

本稿における基本的な仮説は、携帯電話²（PHSを含む・以下同様）の普及により、大学生の新しい友人の探索行動が減少し、携帯電話普及前に比べ、友人関係がより固定化する傾向にあるのではないか、というものである。

携帯電話の普及した現在では、特定の親しい友人がいったんできれば、広いキャンパスのどこにいても互いの居場所がわかるので、休み時間などを限定的にともに過ごすことができる。これまでであれば「仲の良い友人が、一緒にとっているはずの講義に姿を見せないで、どこにいるのかわからない」とか、「いつもいるはずの場所に行ってみても、そこには別の人しかいない」といったこともあっただろうが、携帯電話の利用によって、そうした不確定の要素は最小限に抑えることができるようになった。そして、いつ誰とともに時間を過ごすのかといった決定は、ランダムな状況変化にほとんど左右されずに、自分と相手との主体的な決定に全てが任されるようになったのである。授業が終わっても、隣合った同士で会話は始まるわけでもなくて、それぞれ自分のケータイを取り出して、互いに別々のほうを向きながらクローズされたコミュニケーション空間に入っていく。だからそこでは、たまたま隣り同士になっているといった偶発的な物理的近接は何の意味をもたない。見かけ上物理的に近接している人々も、実際には、それぞれのもっとも仲の良い相手にあらかじめ囲い込まれてしまっていて、単に近くにいるだけの人とのコミュニケーションのチャンネルは開かれようもない。そばにいる人も、文字通り、近くて遠い存在になってしまっているのである。もちろんそのようなことはあらかじめわかっているから、ひとりひとは自衛してケータイで連絡できる相手を確保しておき、物理的に近接する相手には特に期待しないようになる。そして、いっそうコミュニケーションは閉じていく。

もちろん携帯電話の普及前には、休み時間の光景は違っていた。物理的の近接がコミュニケーションの前提条件だったし、仲の良い友人を探しに、サークルのボックスなどのたまり場に急ぐにしても、そこには予期しない人がやってきて、予想しないメンバーと一緒に場所を移

動する、ということが常にありえた。自由な時間とともに過ごす相手として、一人一人が自分の意思だけでコントロールできる部分は比較的小さかった。

こうした人間関係の変化は、「血縁」「地縁」といった選べない関係から、上野（1994）が「選択縁」と名づけたような関係への変化と同一の方向性にあり、携帯電話の普及という文脈では松田（2000 a）が「選択的人間関係」として論じている。そうした議論では、選択的人間関係の発達的前提として、都市化やメディアの発達による潜在的な人間関係の選択肢の増大が想定されている。しかし現実には、そうした選択肢としての潜在的な人間関係も、そのまま放っておけば消えてしまい、選択され淘汰された後の人間関係のなかに閉じ込められてしまうということも十分考えられる。

すでに仲島他（1999）は、携帯電話による関係の固定化という、我々と同様の仮説を提出している。彼らは携帯電話を親密的で全面的なメディアと捉え、「特定少数の仲間とのコミュニケーションを一層緊密化させるために用いている」のではないかと考える。そして「移動電話が、ごく親しい友人や彼氏・彼女との「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」を創ることを促し、友人を二層分化させる機能を持っているのではないか」という仮説を提示している。その意味で携帯電話が作り出すコミュニティは、「ポケベルやインターネットが作り出す電子コミュニティとは逆方向の異質なコミュニティ」であり、「昔の子どもたちのコミュニティに似ている」のではないかとする。

もちろん、携帯電話に友人関係を広げるような要素が考えられないわけではない。まず携帯電話の電話帳機能により、これまでより電話番号の交換が容易になった。実際初対面の大学生同士が、互いの携帯を呼び出して、電話番号を携帯内蔵のアドレス帳に登録している場面をしばしば目にする。吉井らの行った一回生を中心とした文教大の大学生調査では、携帯電話の番号を教えている相手の数は1997年調査では平均26人、1998年調査では平均43人であり、利用者の増加につれ、拡大傾向がみられる（仲島他1999）。調査対象を大学生以外に広げれば、1999年における川崎市における調査において20代前半の人のアドレス帳登録者数は男性平均76名、女性平均77名までに増えていた（宮田2001）。もちろん彼らはアドレス帳に登録した者全体と等しく話をしていないわけではない。頻繁にかける相手数は20代前半の男性で平均13.6名、女性で平均9.7名にまでしぼられる（宮田2001）³。

第二に、現在の携帯電話はほとんどの場合メール機能を備えている。岡田他（1999）の調査結果では、携帯電話の利用者の76.4%が何らかの形でこのメール機能を用いていることが指摘されているが、利用者は女性に偏っているようだ。また多くの利用者は、電話に比べると受信者に迷惑をかける可能性のより低いメール機能を、電話機能と使い分けているらしいことが岡田他（1999）の調査結果より推測される⁴。このように、携帯電話の電話機能よりもさらに気軽に連絡をとりやすいメール機能は、友人関係をより浅く広くしている可能性も考えられる。岡田他（1999）の調査結果によれば、こうしたメール機能の利用者はそうでないものに比べ「（携帯を）持つ人との結びつきが強まった」「夜間・深夜に連絡をとることが増えた」「人との連絡やコミュニケーションの回数が増えた」「ちょっとした用件で連絡をとることが増えた」と答えており、全体的に友人との結びつきをより深くしているものと解釈で

きるが、それが友人層を拡げる方向にあるのか、固定化する方向にあるのかは判断できない。

実際に先行研究では、携帯電話を頻繁に使っている人と使っていない人に関し、社交性などを比べた場合、受信回数や発信回数の多い人はともに「社交的な集まりにはよく出かけるほうだ」「知らない人と話すの苦にならない」とより答えている傾向が見られた（岡田他1999）。また受信回数の多い人だけに関して言えば、少ない人よりも友人数も多いとされている。⁵

しかしこうした調査結果からは、単にもともと社交性が高く友人の多かった人々が、そうした友人関係を保つ必要性からより活発に携帯電話を用いていることが推測されるだけで、携帯電話の普及がこうした社交性や友人数にどのような影響を与えたのか、ということは十分に明らかにされなかった。⁶ 本稿はこうした点を明らかにしていく。

2 調査の概要

前節でみた先行研究と仮説をふまえ、携帯電話の普及が大学生の人間関係にどのような影響を与えたのかを見るため、大学生一回生から四回生までのそれぞれに、一回生の6月頃を回想してもらい、入学時期の違いによって、人間関係がどのように変化しているかを見ることにした。⁷

この調査での基本的前提は、各学年集団は、その出自やおかれた環境に関し、携帯電話の普及率以外には違いがない、というものである。このような基本的前提を可能な限り満たすため、調査のサンプルには、同じ大学の同じ専攻の学生（具体的には関西の私立大学文学部教育学専攻）を選んだ。この四年間において、この学科の入試難易度は偏差値50代後半で大きな変化はなく、入試科目や選抜方法にも大きな変更はなかった。学内の環境についてもやはり大きな変化は見られない。

調査票は2001年10月、クラス授業やゼミなどを通じて配布した。当該の学生374名のうち、69%にあたる259名から回収している。ただし、374名のうちには、調査対象外の編入や留年した学生も含まれているため、実際の回収率はさらに高い。なお性別の構成比は、男子が35%、女子が65%である。⁸

質問紙は次のような区分によって構成されている。A.携帯電話利用に関する質問（利用時間、頻度、通話相手数など） B.携帯電話以外のメディアに接する時間に関する質問 C.友人数に関する質問 D.社交性・積極性に関する質問 E.携帯電話の人間関係に対する影響についての主観的意識 ただしBの質問項目は今回の分析では用いていない。

3 調査結果

3-1 因子分析と、各因子の上下級生別平均因子得点

まずは全体的傾向をつかむために、携帯電話の使用量（A）、友人数（C）、社交性（D）

に関する質問群を因子分析にかけてみる(表1)。⁹

表1： 因子分析に用いた質問項目¹⁰

A.

2. 当時、どのくらいの頻度で携帯電話を使って電話をかけていましたか。
①持っていなかった ②時々 ③2日に一回程度 ④ほぼ毎日
4. 当時、週に一回以上、携帯電話あるいは固定電話をかける、またはかかってくる友達は何人いましたか。(3であげた相手を含む)
①いない ②1～2人 ③3～4人 ④5～9人 ⑤10人以上
5. 当時、1日に携帯電話・固定電話を合計してどのくらい電話を使っていましたか。
①20分以内 ②40分以内 ③1時間以内 ④それ以上
6. 当時、特に用事のない時でも携帯電話をかけることはよくしていましたか。
はい・いいえ
7. 当時、大学の中で特定の友達をつかまえるために「今どこにいるの」という内容の携帯電話をよくかけていましたか。
はい・いいえ
9. 当時、月々の携帯電話にかけるお金はいくら位でしたか。
①使っていない ②5千円以内 ③1万円以内 ④それ以上 (→15000)
10. 当時、携帯電話・PHSのメール機能をどのくらいの頻度で使っていましたか。
①全く使わなかった(携帯を持っていなかった・メール機能がついていなかった)
②ほとんど使わなかった ③時々使っていた ④よく使っていた

C.

1. 当時、クラブ・サークル・自治会活動などに参加していましたか。
はい・いいえ
2. そうしたクラブ・サークル・自治会などのグループ内でプライベートでも会ったり、遊んだりする人は何人くらいいましたか。
①いない ②1～3人 ③4人以上 (→6)
- (3. 当時アルバイトをしていましたか。 はい・いいえ)
- (4. そうしたアルバイト先の友人で、プライベートでも会ったり、遊んだりする人は何人くらいいましたか。 ①いない ②1～4人 ③5人以上)
←因子との共通性が0.1以下だったので因子分析からは削除。
5. 当時連絡をとりあっていた大学入学以前の友達は何人くらいいましたか。
①いない ②1～3人 ③4～5人 ④6～10人 ⑤それ以上 (→14)
6. 当時、直接会うことはほとんどなしに、何らかの手段(電話、メールなど)で個人的に連絡をとりあっていた友人は何人くらいいましたか。(5で答えた相手もこの条件に該当すれば含む)

- ①いない ②1～3人 ③4～5人 ④6～10人 ⑤それ以上 (→14)
7. 当時、同じクラスで、会った時にあいさつ以上の会話をする友人は何人いましたか。
 ①いない ②1～3人 ③4～5人 ④6～9人 ⑤それ以上 (→12)
8. 当時、クラスやクラブ・サークル・自治会など以外の、大学で知り合った友人のうち、
 会えばあいさつ以上の会話をする人は何人いましたか。(→11)
 ①いない ②1～2人 ③3～4人 ④5～9人 ⑤それ以上

D.

1. 当時、あまり親しくない人にもあいさつをしていましたか。
 はい・いいえ
2. 当時、顔見知りではあるが、今まであまり話をしたことがなかった相手に話しかけるよ
 うなことが時々ありましたか。
 はい・いいえ
3. 当時、友人と一緒に夕食を食べることは週に何回位ありましたか。
 週()回
4. 当時、大学内で知らない人にも話しかけることができましたか。
 はい・いいえ

表1の質問への回答結果に対し、因子分析で3因子を抽出し、バリマックス回転を行ったところ、ほぼこのA、C、Dの質問項目に対応した因子が取り出された。以下がその表になる。

表2：:全体の因子分析 (*は逆転項目)

共 通 性

	初 期	因子抽出後
A2 携帯使用頻度	0.494	0.607
A4 電話相手週一回以上	0.376	0.357
A5 電話時間/日	0.161	0.127
A6 無用事携帯使用*	0.309	0.212
A7 位置特定携帯使用*	0.306	0.247
A9 携帯料金	0.564	0.729
A10 携帯メール使用頻度	0.362	0.267
C2 サークル友人	0.204	0.130
C5 高校からの友人	0.460	0.546
C6 オンラインの友人	0.506	0.677
C7 クラス内友人	0.229	0.219
C8 クラス・サークル外学内友人	0.305	0.319

D1 親しくない人に挨拶*	0.239	0.287
D2 顔見知り話しかけ*	0.268	0.323
D3 友人と夕食(回数)	0.231	0.178
D4 見知らぬ人に話しかけ*	0.149	0.109
因子抽出法: 主因子法		

因子	回転後の負荷量平方和		
	合計	分散の%	累積%
1	2.221	13.88	13.88
2	1.572	9.827	23.708
3	1.54	9.628	33.336

表3 (表2の続き): 全体の因子分析 (*は逆転項目)

回転後の因子行列(a)

	因子		
	1	2	3
A9 携帯料金	0.845	0.105	0.053
A2 携帯使用頻度	0.778	-0.012	0.046
A7 位置特定携帯使用*	-0.471	-0.096	-0.127
A10 携帯メール使用頻度	0.458	0.223	-0.089
A6 無用事携帯使用*	-0.436	0.064	-0.132
A4 電話相手週一回以上	0.353	0.338	0.344
C7 オンラインの友人	0.150	0.809	0.023
C6 高校からの友人	0.061	0.734	0.068
D1 顔見知り話しかけ*	0.055	-0.074	-0.561
D2 親しくない人に挨拶*	0.008	0.085	-0.529
C8 クラス・サークル外学内友人	0.128	0.209	0.509
D3 友人と夕食(回数)	0.225	0.072	0.349
C5 クラス内友人	-0.084	0.314	0.337
D4 見知らぬ人に話しかけ*	-0.052	0.026	-0.325
C2 サークル友人	0.074	0.175	0.306
A5 電話時間/日	0.211	0.003	0.288
因子抽出法: 主因子法			
回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法			
a 5 回の反復で回転が収束しました。			

この三つの成分はそれぞれ、携帯電話使用頻度の因子（成分1）、（特に高校からや遠隔地の）友人数の因子（成分2）、新たな関係構築積極性の因子（成分3）、と呼ぶことができるだろう。

まずこの三つの因子を用いて、最初に挙げた仮説の基本的前提を確認するために、それぞれの因子の得点を学年別に比較すると表4のような結果となった。

表4：全体の因子分析における各成分の平均因子得点の、現在の上下級生別の比較

	上/下級生	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
第一因子	下級生	0.259	0.815	0.077
	上級生	-0.194	0.968	0.080
第二因子	下級生	0.152	0.943	0.090
	上級生	-0.114	0.836	0.069
第三因子	下級生	-0.121	0.782	0.074
	上級生	0.091	0.847	0.070

平均値の差に関して*は5%水準で有意、**は1%水準で有意

まず成分1について見ると、これは携帯の使用頻度などを示しており、当然だが、現在の下級生のほうが、現在のの上級生が一回生だった2年半前、3年半前よりも使用頻度が高いことがわかる。特に現四回生だけを見ると、彼らが一回生の6月の時点で携帯を持っていなかった人は31.2%で三割にも上り、一方、現一回生で持っていないのは1.7%にすぎない（表5）。¹¹

表5：携帯使用頻度と現上下級生別のクロス

現在の学年	携 帯 使 用 頻 度			合 計
	持っていない	時々	ほぼ毎日	
現下級生	5 4.5%	63 56.8%	43 38.7%	111 100.0%
現上級生	29 19.6%	79 53.4%	40 27.0%	148 100.0%

カイ二乗検定 1%水準で有意

携帯電話のメール機能の使用頻度になると、さらにはっきりと普及の進展の跡をみることが出来る（表6）。

表6：携帯メール使用頻度と現上下級生別のクロス

現在の学年	携帯メール機能使用頻度			合計
	使わなかった	時々	よく使っていた	
現一回生	2 3.4%	5 8.5%	52 88.1%	59 100.0%
現二回生	5 9.6%	11 21.2%	36 69.2%	52 100.0%
現三回生	20 28.2%	21 29.6%	30 42.3%	71 100.0%
現四回生	55 71.4%	12 15.6%	10 13.0%	77 100.0%

カイ二乗検定 1%水準で有意

次に成分3を先に見ると、因子得点の上下級生差から、現在の一回生は過去の一回生に比べて、「あまり親しくないひとに挨拶」をしたり「顔見知りではあるが、あまり話したことのなかった相手に話し」かけたり、「学内で知らない人に話しかけたり」しなくなったことが読みとれる。実際これら三つの質問への肯定的回答を1点、否定的回答を0点として足し合わせて作成した「新たな関係構築積極性」指標と学年との相関係数を見てみても、0.13で5%水準で有意となった。

最後に成分2だが、これは、成分1で計られる「新たな関係構築積極性」とは比較的關係の弱い種類の友人、すなわち高校からの友人や電話やメールなどでつながっている友人などの数を示していると考えられ、それらの数は現在の下級生のほうが多いことがわかる。もちろんこれは、下級生で全体的に友人数が多いということの意味しない。質問紙に挙げた6種類の友人の数を単純に合計した数を回生別に見ても、一回生21.8人、二回生23.2人、三回生19.8人、四回生20.2人で、回生との相関も-0.08（5%水準では非有意）でなきに等しい。

むしろ、携帯電話が普及することにより現在いる友人といつでも連絡がとれ、また高校までの友人などとの関係を保ちやすくなって、新しい友人の探索行動が不活発になったのだと推測される。今回の質問紙に用意された「携帯電話を持った後、あなた自身の人間関係はどのように変わったと感じますか。自由にお書きください」という項目への回答でも、「高校卒業して別々になった人とかとも仲よくしていけるのでよい」（現二回生・女子）といった記述が数多く見られ、こうした推測を裏付けている。

3-2 種類別友人数と現学年との関係

ではさらに、友人の種類ごとに学年との関係などを詳しく見ていくことにしよう（表7）。

表7：学年、新たな関係構築積極性指数および携帯利用料金と、各種の友人数との相関係数

	サークル友人	バイト友人	高校からの友人	オンラインの友人	クラス内友人	クラス・サークル外学内友人
現 学 年	-0.026	-0.087	-0.103*	-0.139*	0.136*	-0.093
新たな関係構築積極性	0.126*	0.055	0.079	0.015	0.180**	0.371**
携帯使用料金	0.087	0.217**	0.132*	0.231**	-0.039	0.161**

*は5%水準で有意 **は1%水準で有意

まず表7上段から、これら各種類の友人数と、調査時の学年との相関を見る。アスタリクのついている相関係数のみがT検定で5%もしくは1%水準で有意である。マイナスの値は、調査時における学年が上になるほど、友達の数が少なく、下になるほど友達の数が多くなることを意味している。それはすなわち、かつての一回生よりも、現在の一回生のほうがより友達が多いということの意味する。プラスは逆に、かつての一回生よりも、現在の一回生のほうがより友達が少ないということだ。

ここから現在の一回生のほうが、高校からの友人、オンラインの友人が多く、過去の一回生のほうがクラス内の友人が多かったことがわかる。他はほとんど変化していない。

高校からの友人数とオンラインの友人（ふだんは滅多に会わないが、電話やメールなどで連絡をとりあっている友人）の数とは相関係数も0.64に達していて、この調査でたずねている大学一回生の時点において、これらは大部分重なっているものと考えられる。¹⁴であるから、この二種類の友人の数が増加しているということはすなわち、最近の一回生において、過去からの友人関係の優先という意味での保守化・固定化が進んでいるものと考えてよいだろう。同時に、大学一回生の6月という時期において、クラス内の友人が過去の一回生たちに比べ減ってきているということも、彼らが新しい環境下において、積極的な友人作りをしていないことの反映と捉えられる。実際、クラス内友人数と「新たな関係構築積極性」指標との相関を見てみると、有意の相関が確認され、高校からの友人やオンラインの友人では、相関がゼロに近い。新たな関係構築積極性指標との相関で他に有意なのは、サークル内でのプライベートな友人の数とクラス・サークル外での学内友人数であり、特に後者で相関が高い。

一方、携帯使用料金との相関を見ると、オンラインの友人数、アルバイトの友人数、クラス・サークル外での学内友人数、高校からの友人数という順番で高く、携帯電話などを介さずとも学内で普段から会う頻度の多いと思われるクラス内やサークル内での友人数との相関はほとんどない。¹⁵

まとめると、過去の一回生に比べ、現在の一回生では、「新たな関係構築積極性」は低下傾向にあり、携帯使用量は増加傾向にある。その結果、「新たな関係構築積極性」に影響を受けやすいクラス内の友人は減り、携帯使用量に影響を受けやすいオンラインの友人や高校

からの友人は増加した。サークル、アルバイト、クラス・サークル外の学内友人に関しては、こうした影響が互いに打ち消しあって、その数はほとんど増減しない結果となった。

3-3 電話を介した友人関係の少数安定化

さて、これまで友人関係の保守化・固定化という観点から、友人数の種類別の変化に関するデータを解釈してきた。

ふたたびそのデータをまとめなおすと、現在の一回生は過去の一回生にくらべ、①携帯電話をより利用し ②高校からの友人関係をより保っていて ③まだ親しくなっていない人との関係を開拓していくことはあまりせず ④クラス内の友人はより少ない ということになる。

しかしこの同じデータは松田のいう選択的關係論としても理解することができる。すなわち、これまでクラスという日常的な物理的の近接を基礎とした「選べない」関係から、それ以外の「選べる」関係への移行したものである。

携帯電話普及以前においては、大学入学以前からの友人との関係を保つことが比較的難しく、彼らは友人選択の母集団からはずれてしまいがちだったが、携帯電話の普及によりそうした問題が解決された。その結果、友人をより自由に選べるようになり、「選べない」クラスの知り合いよりも、より気の合う高校からの友人との関係が優先されるようになったのではないかと、そのようにも考えられる。

しかしこの二種類の解釈は互いに並存しうる関係にあり、それぞれは互いの別側面を示しているものとしても理解しえよう。つまり都市化と双方向メディアの発達により、友人関係の選択可能な母集団が増大する、というより大きな潮流がまずある。そのなかで、携帯電話普及の直接的影響を見ると、友人関係を持ちうる潜在的な集団は拡大する中で、実際の友人関係は保守化・固定化してあらわれている、ということになる。これはまた、宮田のいう、弱い紐帯と強い紐帯の二重構造という仮説にもあてはまる結果である（宮田 2001）。つまりアドレス帳登録などの潜在レベルでは友人関係は拡大し（弱い紐帯）、この調査での友達の定義である「会ったときに挨拶以上の会話をする」という意味では友人関係は固定化しているといえる（強い紐帯）。

さらにこうした友人関係のうち、電話による連絡という関係だけをとりだしてみると、単に保守化・固定化というだけでなく、友人関係の少数安定の方向にあることがわかる。

表8、9は電話相手の数と現上下級生とのクロス表である。¹⁶表8で5%水準有意の結果が出ている。そこでは、現上級生すなわちかつての下級生と比べ、現在の下級生において、二日に一回電話で話をする友人はいないという人が減り、1人から2人という人が大幅に増加していることが読みとれる。しかし3人以上の人と電話をかけあっている、という人の人数はほとんど変わっていない。週一回以上電話で話をする、という相手の人数についても有意にはならなかったものの、やはり1人から2人という人が増加している傾向が見える。

ここから、かつては電話で連絡をあまりとりあうことのなかった層でも、携帯電話の普及

により、電話で連絡をとりあう人間を1人か2人確保するようになったことがわかる。ただし携帯電話によって便利になったからといって、3人以上の人と連絡をとりあうような人々は増えていない。

表8： 二日に一回以上電話で話をする友人の数と現上下級生とのクロス

現在の学年	電話相手隔日一回以上			
	いない	1-2人	3人以上	合計
現下級生	24	55	31	110
	21.8%	50%	28.2%	100%
現上級生	53	55	39	147
	36.1%	37.4%	26.5%	100%

カイ二乗検定 5%水準で有意

表9： 週に一回以上電話で話をする友人の数と現上下級生とのクロス

現在の学年	電話相手週一回以上			
	いない	1-2人	3人以上	合計
現下級生	12	42	57	111
	10.8%	37.8%	51.4%	100.0%
現上級生	27	42	78	147
	18.4%	28.6%	53.1%	100.0%

カイ二乗検定 5%水準で非有意

これより、携帯電話の普及によって、もし1人2人の電話相手もいなかったとすれば、なんとかそうした友達を見つけなければ、というプレッシャーがかかるようになり、しかしそれ以上の友人は特に必要とされなくなったことが推測される。

この傾向は、「新たな関係構築積極性」指標と電話相手の数との相関を比較することによって確認することができよう。

表10：上下級生別 電話相手の数（隔日一回以上・週一回以上）と「新たな関係構築積極性」指標との相関係数

	隔日一回以上	週一回以上
現下級生	-0.098	-0.092
現上級生	0.191*	0.310**

* 5%水準で有意 **1%水準で有意

(どちらも上下級生の相関係数の差は1%水準で有意)

この結果から、現上級生ではプラスの相関関係が見られ、現下級生ではそれが見られない

(どちらかといえばマイナスの相関関係が見られる)ということがわかる。すなわち、かつての大学生では積極性が高ければ高いほど電話の話し相手の数が多かったが、現在は逆に、積極性が高ければ高いほど話し相手の数が少ない、ということである。

積極性と電話の話し相手の数には、積極性が高くなれば話し相手が多くなるという因果関係と、電話相手が少なければ積極性を高くするようになるという因果関係との、二種類が想定できる。積極性による友達獲得の効果がそれほど変化していないと考えるなら、この現在と過去の大学生の違いは、携帯電話の普及にともない、少数の電話相手を確保することの必要性が高まり、またそれを確保してしまえばそれ以上の相手を見つける必要がなくなったということとして理解できる。¹⁷

4 おわりに

本稿では、大学生においてここ数年の間に急速に普及した携帯電話の友人関係に関する影響を、ある大学のケーススタディーから明らかにしようと試みた。その結果明らかになったのは、次の3点である。第一に、現在の大学一回生は過去の大学一回生にくらべ、高校からの友人関係をより多く保持しているということ。つまり友人関係の保守的傾向が見られる。また第二に、現在の大学一回生は過去の大学一回生にくらべ、学内において、見知らぬ相手やまだあまり親しくない人との関係を開拓していく積極性に薄い。これもやはり友人関係の保守的傾向として理解できる。ただし、少数の電話での話し相手をいまだ確保できていない場合に限っては、より積極性が発揮される。その結果、二日に一回は電話で会話をする相手を一人二人確保している可能性が高いが、三人以上電話での話し相手を持っている割合に変化はない。第三に、そうした大学入学後の友人探索活動の低下により、現在の大学生がクラス内において得た友人は、過去に比べ、より少なくなっている。ただし大学入学前からの友人との関係をより強く保持しているなどのため、友人の総数そのものには変化はない。

このように、今回の調査では、最初に提示した「携帯電話の普及により、大学生の新しい友人の探索行動が減少し、携帯電話普及前に比べ友人関係がより固定化する」という基本仮説を支持する結果がえられた。

ところでこの結果だが、これは大学生個々人の大雑把な実感レベルとは異なったものとなっており、そこに本調査のひとつの意義を認めることができるだろう。先行研究でも註6に挙げたように、携帯利用者の実感レベルでは「特に変化は見られない」とされてきたが、今回の調査でも、大学生自身の実感レベルで携帯電話所有の友人関係への効果について、深い／浅い、広い／狭いの二つの軸でたずねる質問を用意していた(「携帯電話を持った後、あなた自身の人間関係は広がった(／深くなった)と感じますか」)。その結果、ほぼ半数(48.5%)のものが双方の質問に「変わらない」と答え、残りはどちらかの質問に「深くなった」もしくは「広がった」と答えている。「浅くなった」「狭くなった」という答えはそれぞれ全体の1.6%、6.2%に過ぎなかった)。ここから全体的な変化の方向はどちらかといえ

ば、大学生の実感レベルで見ると「深く」「広く」という方向にあると考えられる。

これまで見てきた分析の結論と、この実感レベルでの調査結果とは、少なくとも「広さ／狭さ」に関しては正反対の結果となっているわけだが、これには二つの解釈が可能だろう。第一の解釈は、実感レベルでの評価には、携帯電話の普及とは無関係に、高校から大学へといった個人の属する社会の広がりや効果などが混入している可能性が考えられるためあてにならない、というものである。第二の解釈は、宮田（2002）のいう「弱い紐帯と強い紐帯の二重構造仮説」にのっとり、実感レベルで「広くなった」と言われているのは弱い紐帯に関してのみのことで、強い紐帯に関してはより「狭く」「深く」になっている、というものである。その解釈に則す場合、今回の質問で「友人」の基本的な定義とした「会ったときに挨拶以上の会話をする相手」は、どちらかといえば強い紐帯に属するということになるだろう。

「携帯電話を持った後、あなた自身の人間関係はどのように変わったと感じますか。自由にお書きください」という自由回答項目への回答を見る限りでは、第二の解釈がより正しいように見受けられる。実際、前に見た質問へ「広く」「深く」と回答した者には、この自由解答欄に「メール機能を使うことでこまめに多くの人とかんたんに連絡がとれるので浅く広く、また仲の良い友人とはより深く付き合えるようになった」（現四回生・女子）といった趣旨の文章を書いているものがしばしば見られ、この仮説を支持している。

こうした点のさらなる検証は今後の課題となるだろう。また今回の調査では、一回生における新しい友人の探索活動の低下が、大学の四年間を通じてその後も続くのか、そしてそれがもし続くのであれば、探索活動の低下はどのように友人関係に影響を与えるのかといったことも方法的制約により明らかにできなかった。今後、新たな調査でそうした点をより明確にしていきたい。

註

1. 本研究は関西のある私立大学において、2001年10月、筆者と永瀧雅子が共同で行った調査結果に基づいている。本研究の基本仮説は永瀧との共同作業の中から生まれたものであり、彼女との対話から大変多くを学んだ。ここに感謝したい。ただし分析作業は個別に行い、本論稿の文責は専ら小原にある。同データの永瀧による分析は永瀧（2002）にまとめられている。
2. 以下、「携帯電話」にはPHS（簡易型携帯電話）も含め、慣用に従って、しばしば「携帯」と略記する。携帯とPHSでは利用のされ方に大きな違いはない。
3. こういった発信の選別、ならびに携帯電話の番号通知機能による受信の選別を通じた新しい種類の人間関係の構築もまた、松田（2000）のいう選択的人間関係の一側面といえる。宮田はこうした選択の母集団となるような電話帳登録者レベルでのつながりを「弱い紐帯」、実際に頻繁にかける相手とのつながりを「強い紐帯」として、二重構造の

人間関係として携帯電話を介した新しい人間関係を捉えている。

4. ちなみに、今回の龍大での調査では、携帯電話のメール機能はここ数年で急速に普及し（表6参照）、現一回生での利用率は96.6%（「よく使っていた」+「時々使っていた」）に達している（男子90.5%、女子100.0%）。男女差も依然として見られるがその差は縮まっており、統計的にも有意ではない。一方、使い分けに関して、岡田他（1999）の調査によれば、緊急の連絡をとりたいとき、携帯電話または自宅に直接電話するものは、男女とも95%を超えるが、「用事はないが、時間が空いたので誰かと連絡をとりたいとき」には、携帯電話のメール機能やパソコンのEメールで連絡をとろうとするものは、男性で31.4%、女性では46.5%いるとされている。
5. なお本調査では、携帯使用頻度や携帯使用料金と「あまり親しくないひととも挨拶する」「顔見知りだがあまり親しくなかった人に話しかける」「大学内で見知らぬ人に話しかける」といった項目との間に有意の相関は見られなかった。ただし、「週あたりの夕食をともにする回数」とはそれぞれ0.2前後の相関が確認されていて、携帯電話の頻繁な利用者は、対面レベルでの交友活動がより活発であると考えられる。
6. 中村（2001）は、携帯電話使用者の実感レベルにおいて、携帯電話の人間関係への「強い影響はあまり確認されていない」としている。一方、我々の調査では、携帯電話使用者の主観を超えた客観的変化の把握を試みている。
7. 一般的にこうした回想法にはデータの信頼性での限界が指摘されているが、少なくとも本調査においては、携帯電話の使用頻度などで、予想したとおり1回生から4回生で使用頻度が減少しているといった結果がでているなどの事実から、ここでの分析においては十分に信用できるものと考えられる。
8. 女性の割合が高いが、3-1で見ている因子分析による三つの成分の因子得点に男女で有意差はなく、今回調査した項目に関しては特に性別を分けて扱う必要はないと判断した。
9. これらの質問のうち、「3人から4人」などといったカテゴリーの選択式になっているものは、実数化した上で因子分析を行っている。具体的には、「3人から4人」などは、上限値・下限値の合計を二分し、3.5として計算し、「10人以上」などについては、実数で記入してもらった予備調査の結果から、はずれ値を除いた値の平均から計算している。その変換後の値は表1を参照。相関係数は、こうした実数により、ピアソンの相関係数を用いている。なお当初、Eの携帯電話の人間関係に対する影響の設問も因子分析に加えていたが、共通性が低かったため、本分析からは省いてある。
10. A-3は、A-4と類似するため因子分析には含めていないが、「当時、少なくとも2日に一回は、携帯電話あるいは固定電話をかける、またはかかってくる友達は何人いましたか」ということをたずねている。またこのC-1の質問はC-2の質問と組み合わせ、C-1の「いいえ」をC-2の「①いない」（=0人）として因子分析を行っている。
11. また携帯使用料金でも、現学年との相関を見ると-0.244となり、携帯電話会社各社の料金値下げにも関わらず、やはり現下級生のほうが平均してより高い使用料を払っていることがわかる。

12. 調査の規模が小さいため、個別の質問と学年とのクロス表では有意差はでなかったが、それぞれにおいて一貫した傾向が確認されている。
13. 各種の友人の定義として、サークル、バイトの友人は「プライベートでも会ったり、遊んだりする人」、高校からの友人、オンラインの友人は「連絡をとりあっていた人」、クラス、クラス・サークル外の学内友人は「会えばあいさつ以上の会話をする人」としている。
14. 質問項目 B の調査結果より、彼らのうち一回生のこの時点においてインターネットを使用していたのは現上下級生ともに全体の4割で、一日平均使用時間もそれぞれ平均15分以内に過ぎず、インターネットなどを通じての友人数は非常に少ないものと考えられる。
15. ただし携帯使用料金とアルバイトの友人数の関係に関しては、高い携帯料金（が払える、払わないといけない）⇔バイトをする→バイト先で友達ができる というような因果関係も考えられる。実際、アルバイトをしている人の携帯使用料金は月平均7700円、していない人の料金は月6700円で1000円の違いがある。
16. A-3については、註9を参照。
17. ちなみに、各種の友人数と友人探索積極性指標との間の相関を上下級生別に見たとき、高校からの友人とオンラインの友人において、相関係数で有意の差がでる。高校からの友人×友人探索積極性指数の相関は、上級生0.19 下級生-0.04、オンラインの友人×友人探索積極性指数の相関は、上級生0.13 下級生-0.10、となる。この違いもやはり下級生において、少数のふだんからの連絡相手を確保しておくことの必要性和結びつけて解釈できよう。

参考文献

- 阿部由貴子 1997,『現代青年層の移動体通信ライフ』ライフデザイン研究所。
- 浅野智彦 1999,「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなほっちの世界』恒星社厚生閣 41-57頁。
- Fischer, Claude S. 1976, 松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社 1996。
- 1982, *To Dwell Among Friends*. The University of Chicago Press.
- Claude S. 1992, 『電話するアメリカーテレフォンネットワークの社会史』NTT出版 2000。
- 橋元良明 1998,「パーソナル・メディアとコミュニケーション行動」竹内郁郎・児島和人・橋元良明編著『メディア・コミュニケーション論』北樹出版, 117-138頁。
- 橋本良明・是永論・石井健一・辻大介・中村功・森康俊 2000,「携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究」『東京大学社会情報研究所調査紀要』第14号, 83-192頁。

- 池田謙一編 1997,『ネットワーク・コミュニティ』東京大学出版会。
- 伊藤耕太 2001,「携帯電話利用とコミュニケーションの変容」『同志社社会学研究』No.5
125-134 頁。
- 栗田靖之編 1987,『日本人の人間関係』ドメス出版。
- 松田美佐 2000 a,「若者の友人関係と携帯電話利用」『社会情報学研究』第4号 111-122 頁。
—— 2000 b,「パーソナルフォン・モバイルフォン・プライベートフォン」『現代のエス
プリ』205号 126-138 頁。
- 松田美佐・富田英典・藤本憲一・羽渕一代・岡田朋之 1998,「移動体メディアの普及と変容」
『東京大学社会情報研究所紀要』第56号 89-108 頁。
- 松本康 1994,「都市はなにを生み出すのか」森岡清志・松本康 編『都市社会額のフロン
ティア2 生活・関係・文化』日本評論社 33-68 頁。
- 宮田加久子 2001,「携帯電話利用と対人関係」『研究所年報(明治学院大学社会学部付属研
究所)』No.31 65-80 頁。
- 諸井克英 1993,「大学生における孤独感と電話コミュニケーション」『静岡大学人文学部
人文論集』43 卷2号 1-32 頁。
—— 2000,「青年における携帯電話コミュニケーション」『電話相談学研究』第11 卷2
号 79-89 頁。
- 永瀧雅子 2002 「大学生における携帯電話の使用と人間関係の変化に関する調査研究」 龍
谷大学卒業論文
- 仲島一朗・姫野桂一・吉井博明 1999,「移動電話の普及とその社会的意味」『情報通信学会誌』
Vol.16, No.3 79-92 頁。
- 中村功 1997,「移動体通信メディアが若者の人間関係および生活に与える影響」『情報通信
学年報』27-40 頁。
—— 2000,「携帯電話の普及過程と社会的意味」『現代のエスプリ』205号 46-57 頁。
- NHK 放送文化研究所編 2000,『現代日本人の意識構造第5版』日本放送出版教会。
- 野村総合研究所 1999,『情報通信利用に関する第9 回実態調査』
<http://www.nri.co.jp/news/2001/010510/010510.pdf> 。
- NTT サービス開発本部編 1991,『日本人のテレコム生活 1991』NTT 出版。
- 荻野綱男 2000,「若者の言語行動と携帯電話」『現代のエスプリ』205号 139-153 頁。
- 大谷信介 1995 a,『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク』ミネルヴァ書房。
- 大谷信介 1995 b,「<都市的状況>と友人ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』
勁草書房。
- 岡田朋之・松田美佐・羽渕一代 2000,「移動電話利用におけるメディア特性と対人関係」『情
報通信学会年報』43-60 頁。
- 佐々木輝美 2001,「携帯電話の所有と青少年のコミュニケーション行動」『青少年問題』
第48 卷5号 30-36 頁。

- 佐藤俊樹 1992, 「解体する日本的コミュニケーション」アクロス編集室編『ポップコミュニケーション全書』Parco 出版 298-321 頁。
- 総務庁青少年対策本部編 2000, 『青少年と携帯電話等に関する調査研究報告書』大蔵省印刷局。
- 渋谷昌三 2000, 「携帯電話にみる現代の人間関係」『現代のエスプリ』205号 74-84 頁。
- 富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦 1997, 『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム。
- 都築誉史・木村泰之 2000, 「大学生におけるメディア・コミュニケーションの心理的特性に関する分析」『応用社会学研究』No.42 15-24 頁。
- 辻大介 1996, 「若者におけるコミュニケーション様式変化」『東京大学社情報研究所紀要』第51号 42-61 頁。
- 1998, 「ケータイと『とか』弁」『学叢』62号 7-11 頁。
- 1999, 「『とか』『ってゆうか』のコミュニケーションと友人関係——関西大学生調査報告書——」<http://www.2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~tsujidai/paper/r/01/report01.htm>。
- 上野千鶴子 1994, 『近代家族の成立と終焉』岩波書店。
- 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸 1992, 『メディアとしての電話』弘文堂。
- 吉井博明 2000, 「若者の携帯電話」『現代のエスプリ』205号 85-95 頁。